女捜査官
催眠調教
痴女に変えられた私
小説 冬野ひつじ
挿絵 竜胆
立ち読み版

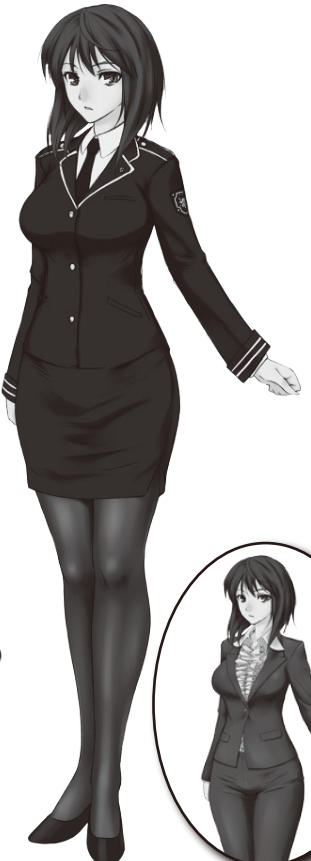
第一章　萌芽する劣情　006
第二章　蝕まれゆく正義　055
第三章　恥悦のプログラム　121
第四章　凛々しき花は淫獄に沈む　182
エピローグ　白き泥濘　238

登場人物紹介

Characters

小此木綾香（おこのぎあやか）

首都警備局特別捜査隊、別名「白椿隊」に所属する捜査官。最年少で隊長に抜擢され、局の広告塔的な役割も担っている。



栗原詩織（くりはらしおり）

綾香の義姉で、殉職した綾香の兄である洋一郎の妻。職場では綾香の上司でもある。

抱きすくめるようにして覆いかぶさってくる男の重みをぼんやりと感じてると、突然一気にパンティを引き下ろされた。
「きゃ……!?」
しどけなく開いたままになっていた脚を急いで閉じようとした時には、持っていた傘でパンティを足首まで落とされ、子供のように脚を順に持ち上げられて、完全に脱がされる。
「これでどんな女も逃げようとはしなくなる」
「くッ……あなた達って、本当に最低ッ、人間の屑ね……」
辛辣な台詞を吐いたものの、ノーパンにされてしまった女捜査官の声は弱々しい。
「その最低な痴漢のチンポを握ってヨがってるのは隊長サンだろ？」
「だッ、だから再現してるだけだと何度言えば……ッ!?」
そんなやりとりの間にも男根は先走り汁を吐き、早く挿れさせろと言わんばかりに細い指をネバネバとした糸で汚していく。
「ふぅッ、そろそろチンポも我慢できなくなってきたな……よし、しっかり可愛がってやるから、そのままケツを突き出すんだ」
「……あ……ハァ……ッ、そんなッ、い、挿れなきゃいけない……の……？」
挿入までの捜査になると知って、さすがの敏腕捜査官もやや不安げな顔になる。
「今更何だよ？　最後まで再現しなきゃいけないんだろ？　俺はこの後、アンタのお手々

のなかのソレを突っ込んでやったんだ、当然、アンタにも入れさせてくれるんだよな？」
（な、何を躊躇ってるの、捜査のため身体を張るのは……そう、当然の事なんだから……）
「そ……それなら、仕方ないわよね……いいわよ……挿れなさいよ……」
「それでこそエリート捜査官サマ、公僕の鑑だ。へへッ、さっそくヌいてもらおうか」
片手で乳房を揉みしだかれ、耳元で卑猥な行為を命じられても、もう抵抗する気力も残っていない。
（……そう、ちゃんと……犯行を再現……しなきゃ……）
喘ぎながら素直に突き出したお尻に熱いモノが当たる。
（そ、そうだわ……こういう時に使う、大事な道具を忘れる所だった……）
乱れたセーラー服のまま、女捜査官は真剣な顔で鞄の中を探り始め、
「ちょっと、待って……、あ、あったわ」
取り出したのはローションのボトルだった。
「これを使って、私のお尻にそのオチンポを入れるのよ」
（……こんな太いモノ、お尻の穴なんかに入れたら、裂けちゃう！）
男に言っていると同時に、脳髄の奥で微かな悲鳴が聞こえた気がしたが、それも一瞬。
女捜査官は男に向けて白い尻肉を自ら割り広げる。
「……さぁ、早くしなさい」
だが、自ら挿入を急かしたものの、初めての異物を前に尻穴がそう簡単に広がるはずも

なく、括約筋はギュッと締まったまま、ローションでぬめる怒張の侵入を拒んでいる。
「……なんだ、まだ固いな。もっと力抜けってば」
挿入できないもどかしさにイラ立っているのか、男の腰の動きが段々粗雑になってきた。
「当たり前でしょ、初めてなんだから……ンッ、ちゃんと入るように揉み解してよ」
（お尻にだなんて、ちょっと怖いけど……あぁ、でもッ、挿入された感覚が分からないと、ちゃんとした取り調べには……ハァッ、ならない……から……頑張らなきゃ……ッ）
女捜査官は自分の白い双丘を掴んだまま、覚悟を決める。
「初めて、って……おいおい正気かよ？」
追加のローションを掌に取っていた男は、美人捜査官の発言に心底驚きの表情を見せた。
「捜査官なのに、犯罪者にアナルバージン奪って欲しいとか……アンタ、相当なマゾだぜ」
「いいから早くしてくれないと見分ができないじゃない！　もうッ、これはれっきとした、ンハァッ……と、取り調べなんだから……ッ！」
柳眉を逆立てて言いつのる様子に、やがて痴漢男は何を思ったのか、嬉しくて堪らないという顔になっていく。
「すげぇ……アンタ、本当にすげぇよ……再現のためにここまでヤられたいだなんて……まぁ、捜査官サマの好みの方が多分に多いんだろうけどな……ふふッ、そうとなったら、今からぶっといチンポでたっぷり可愛がってやるぜ、ヘンタイ捜査官サマよ」
太い指が排泄孔の縁をゆっくりとなぞり、淫靡なマッサージを開始した。

「お、これ媚薬入りのヤツかよ、さすが性犯罪専門の隊長サンは準備がいいな」
ぬるぬるとしたローションは直腸の熱さですぐに水状になり、少しの傾斜でも一気に腸内深くにまで流れ込んでいく。
（ああッ、これ薬入ってるの？　熱い……ッ！　お尻の中まで、ジンジンする……ぅ……）
指先で揉まれるたびに、にゅくっ、にゅくっ、と、これまで覚えた事のない違和感がアナルを虫のように這い、乙女を戸惑わせる。
（どんどんヘンな気持ちに……あぁ、なって……ふぁッ、熱い……ぃ……！）
ローションが粘膜に染み渡るのに時間は必要なかった。
「……ひぅっ……ひぃ……ッ！」
禁断の扉をこじ開けて丸っこい人差し指が侵入して来た時には、少女の直腸では無数の襞がペニスを受け入れるため熱く煮え立っていた。
「も、もっと……奥にッ……ああッ、もう、これでいいからッ！」
送り込まれる肉棒の速度にもどかしくなって、綾香は腿を大きく開くと、内側から手を伸ばして自らのアナルに肉棒の先端を押し当てる。
ツプ……ッ……。
（あぁ、大きい……これがお尻のまで入ったら……ど、どんな感じなの……？）
加速する欲情に後れを取ったローション塗れの菊門が、ありえない質量を感じて再び小さく窄む。そこへ亀頭が捻じ込まれる。

「ひいっ!?」
肛門に違和感が走り、上気した顔が苦痛に歪んだ。
「はぅッ……ッ！　くッ、く……ヒィッ！」
いくら媚薬と男の指で解れているとはいえ、やはり初肛交の違和感は乙女から余裕というものを全て奪い取ってしまっていた。
（や、やっぱりダメ、こんなの無理……！）
普通の女の子より遥かに鍛えられているとはいえ、手すりに掴まり、爪先立って限界まで腰を天井に向けて突き出すという姿勢に、脚の筋肉も悲鳴を上げそうになる。
（ああッ、いくら捜査でも、もう……無理……）
目尻に涙が盛り上がった時、
ズチュ……ンッ！
「くひぃぃッ!?」
一生忘れられないであろう強烈な刺激が、綾香の直腸を抉(えぐ)っていた。
「……あハァッ、入って……ッ、は、入ってるぅ……ッ！」
身体がこのまま壊されるのではないかと思ってしまうほどに強力な、肉凶器が腸壁越しに自分の内臓を掻き分ける感覚が、ズシッズシッと間断なく全身に響く。
（あぁ……ッ、これ、これが痴漢のオチンポ……ッ……）
「アハハッ、本当にケツマンコでチンポ咥えやがった」

塚野の下品な笑い声までが肉棒を通じて腸襞を震わせ、少女を喘がせた。
「あンッ、はぅあ……ッ、ハァ……アッ！」
（苦しいッ、けど……こんなのッ、あぁンッ、初めて……ぇ……）
違和感は明瞭な快感に形を変えて、少女の脳内に肛門性愛の悦びを打ち込んでいく。
「ひぅ……ッ、はぁッ、はぁぁ……ン……」
少しずつ括約筋を押し広げて侵入してくる男根に、気が付けば噎び泣きで応えていた。
すると今度は、深々と刺さった肉杭が荒々しく引き抜かれ、
「んヒィ……!?　め、めくれるぅ!?」
排泄感に似た野太く甘美な刺激が直腸を震わせる。
「どうだ!?　ケツ穴感じるだろ……ッ!?」
指とは全く違う硬さの肉に腹の中を掻き回され突き上げられ、時には咽喉元近くまで挿されていると錯覚するほどの激烈な抜き差しに、緩んでしまった表情を取り繕う暇もない。
「感じてなんか……ぁッ、あヒィッ！　感じてなんかない……ぃ！」
まだ強がりを捨てない捜査官の紅く染まった唇からは、喘ぎと同時に涎が垂れていく。
「こんな、ハァッ、お尻なんかでッ、か、あぁッ!?　そんな深く……ッ!?」
（ああ、スゴイッ！　痴漢って、こんなに気持ちよくされちゃうものなの……!?）
内臓の間に肉杭を叩き込まれ、ひしゃげ、蹂躙される。その苦痛が、快楽と表裏一体であるという事を、女捜査官の初心な肉体は今まさに実地で学習していた。

「目付きが全然変わって来てるぜ？　な、電車で生ハメされるのって最高だろ？」
腸液の分泌が盛んになったせいでスムーズに動くようになった肉棒でズンズンと責め立てられれば、肯定の言葉以外はもう出ようもない。
（な、生ハメだなんてッ、こんな、犯罪行為をッ、許すわけには……ハァン、いかないのにぃ……オチンポ入れられて、ズンズンされて……ッ、気持ちイイ……ッ！）
「ンッ……全然ッ、ンハァッ！　私はそうは思わないわ……ンッ！」
口ではそう言いながらも、腰は中年男の動きに合わせてあさましく動き、ちゅぷちゅぷと迸る愛液は男の腰までずり下がった安物のズボンをべったりと濡らしている。
「なぁ、最高だろ？　病み付きになっちゃいそうだろ？」
「病み付きだなんてッ、そんな……ッ、はぅッ！　はぁぁン⁉」
（ち、痴漢のオチンポでッ、こんなに気持ちい……いえッ、ひ、酷い目に遭わされただなんて……被害者の、心のケアを……し、しっかり……ッ、するために……ハァッ、私も、最後まで追体験しないと……ッ！）
にゅるるッ！　ずぶぶッ！　ずぶッ！　にゅるるる……ッ‼
（ああン、お尻の中ッ、オチンポでぐにゅぐにゅ扱かれて、ハァッ！　溶けちゃうぅ！）
肉棒と腸壁が、ほんの僅かの隙間もないほどに密着している一体感に、少女の意識はすっかり蕩けてしまっていた。
「ほーら、隊長サン、痴漢とキスだ……ッ」

頭を掴まれ顔だけ振り向かされると、興奮のあまり男の目は真っ赤に血走っている。
「ンッ、べろ……ッ、んぶッ、ちゅぅぅぅッ！」
キスの音、というには下品な破裂音が響く室内が暑いのは、締め切った窓のせいだけではない。綾香の体温は男の体温に引き摺られるようにしてどんどんと上昇していく。
「んちゅ！　んふッ……ぶちゅ……ゥ……」
犯してはならない穴を犯されている感触。してはいけない事をしているという感覚。自分の身体はこの男にとって今や肉筒でしかないという被虐感と、捜査のためとはいえそんな男に大事な穴を引き裂かれているという屈辱感に苛まれながら、綾香は送り込まれる快感を全て貪る。
「……ンッ、ふぅン……ッ、ンふぅ……ンちゅ……ッ……」
絶え間ない嗚咽を生じさせているのは苦痛ではなく、未知の物を体内に受け入れているという驚きと、直腸の襞を擦られているという原始的な気持ちよさ。ただそれのみだった。
「んぐぅ……ッ、ふぅ……ッ……！」
ほんの少し男が腰を引いただけで、内臓全てが肛門から引きずり出されそうな感覚に、腸壁がヒクついて腸液をプシュプシュと噴射する。
「くッ、はぁ……この数分ですっかり淫乱なケツマンコになったな……抜こうとしても襞が絡んで、ンッ、奥にチンポ誘いこみやがる……ッ！」
流れるようなヒップラインを乱暴に揉みしだき、痴漢男はこめかみから流れる汗を拭こ

うともせず陵辱に励む。
「ンッ、ぷぁッ……誘ってなんかないッ！　誘ってなんか……ンッ、ひぃ……！」
互いの口から漏れる喘ぎ声の他は、汗に塗れた肌のぶつかり合う音がやけに大きく響く。
「よしッ」
男は獲物の腰を両手で鷲掴みにすると、ひときわ激しく自分に打ちつける。
「そろそろイクぞッ！」
べちべちと肉が鳴る。応えるようにセーラー服の背中でポニーテールが飛び跳ねた。
「ンぁッ？　ひぃッ……はぅぅぅ……ッ!!」
「啼け啼けッ！　うはぁッ、マジで最高のケツ穴だぁ……ッ！」
乙女の大腸は最大限のストロークで蹂躙され、だというのに腸襞はそのたびに追いすがるようにして肉棒に絡み、放すまいと吸い上げる。そしてその振動は膀胱にまで甘刺激を送り込み、バチュンバチュンと突かれるたびに、中の液体は出口を求めて波を立てるのだ。
（お腹の奥ッ、オチンチンでそんなに、あッ、ギュウギュウ押されたら……ッ、あぁ、お、おしっこ、出ちゃいそう……！）
奥歯を噛み締めて堪えても、膨らんだ尿意は、もう少女を許してはくれなかった。
（あひィッ！　もうダメぇ！　おしっこの穴も、熱くてもう、我慢できない……！）
大腸と膀胱という二つの排泄器官が、内側から生まれたそれぞれの圧力から何とかして解放されようと欲求の信号を脳に送り込んで来る。

「熱い……熱いッ！　もう、あ？　やぁッ⁉　お、おしっこッ、出るッ⁉」
ジョロロロロ……ッ……！
「……あ、あぁ……ン……そんな……ぁ……」
激しく床を打つ聞き覚えのある排泄音と共に脚が生暖かい液体で濡れるのを、綾香は呆然として感じていた。
（ンはぁッ、私ッ、大人なのにおしっこ、お漏らし……してる……ぅッ！）
……ジョロ……ジョロロロ……ォ……。
長々と続く失禁。しかし男は構いもせずに大きく腰を振った。
「そらッ！　一発目だッ！　ションベン漏らしながらイきやがれ……ッ！」
熱く脈打つ肉棹が燃えたぎる直腸で生き物の様に跳ね上がる。
（出すって、え？　お尻の中で、出すの……ッ⁉）
だが、快感の中で芽生えた不安も、たった数秒で掻き消される。
「いいわよ、ハァン、早くッ、精液、だ……出しなさいよ……ぉ……ッ」
今までに上げた事もないような自分自身の甘い声に興奮して、牝穴はますます盛大に愛液を噴き股間を濡らす。
（はうぅッ！　腰ッ、ぶつかってッ！　お尻が潰れちゃうッ！）
激しいピストンを美尻の中と外で同時に受け、女捜査官は全身をバウンドさせる。
「あハァッ！　はぁッ！　お尻に……ッ、お尻いッ！　は、早くッ、出してぇッ！」

自分の背中の下の熱く燃えている部分が、男の肉なのか、自分の肉なのかもはや判然としないまま、直腸へ吐精を催促すると、
「オラァ……ッ！　痴漢のザーメンたっぷり味わえよぉッ!!」
ドビュルルッ！　ビュルッ！　ビュルルルゥーッ！
「あああああぁーッ!?　熱いッ!?　お尻ッ、熱いぃッ!!」
これ以上はないというくらいに充血させられた腸粘膜へ、陵辱者の肉ホースから高圧の白濁汁が襲いかかった。
「あひ、もうッ、お尻……ッ……焼ける……ッ　焼けてるのにッ、ああッ!?」
ビュルル……ッ、ビュク……ッ……ビュク……ッ……。
腸内に熱い精液を注がれて、少女は思わず仰け反った。弾みで締まった膣から千切れた蜜柱が飛び、床の上に半透明の線を一筋描く。
「あッ、ハァ……ッ、ハァァ……ン……いいのぉ……ッ……」
甘い声で啼きながら身を捩り、尻肉をプルプルと痙攣させ続ける女隊長。その目元は涙で濡れつつも、はっきりと分かる欲情の色で紅く色付いている。
「……ひッ……ひぁ……ッ……」
ようやく吐精の終盤に差し掛かった肉棒を名残惜しげに締め付けながら、白椿隊の隊長はアナル受精の背徳的な快感にしばし漂う。

「んグッ……ッ、んんんーッ!?」
発情中の女捜査官は、もうそれで軽いアクメに達していた。
（……く、臭い……それに、恥垢も……あぁ、いっぱい咽喉に……付いちゃった……）
「おぉぉッ、こんなんでイっちまうなんてお嬢ちゃんは本物のヘンタイ女だなぁ！　こうなったら遠慮はしないぜッ、オジサンのチンコの臭い忘れられなくなるくらい、へへッ、絶品の咽喉マンコにッ、ハァッ、チンコ汁たっぷり塗りつけてやるからなぁ……ッ！」
ピストンを始めるのと、男が綾香の髪を掴み引き寄せて腰を振り始めるのとが、ほとんど一緒だった。
ジュポッ、ジュポッ……ジュポジュポ……ッ！
べたつくフェルトのような感触の茂みに顔を押し付けられながら、路上デビューを果たしたばかりの痴女は、咽喉と舌を交互に使いながら激臭棒に奉仕をする。
ジュポポッ、ジュポ……ッ！
口の中で唾と先走りの汁が攪拌される。恥垢が溶けてクリーム状になり、頬粘膜に万遍なく取り付いて牡の臭いを容赦なく塗り込んでいく。
（ンッ、ふぅッ！　臭過ぎてッ、頭の中ッ……真っ白……ッ……！）
「あッ、そんなにしたらもう出ちまうだろぉ……!?」
髪を掴んでいた男の手が放れ、粉雪のようなフケと共に切なげな吐息が落ちて来る。
「せっかくなんだから、もっと楽しませてくれよ……ッ、スケベなお嬢ちゃん……」

顔にかかってくる髪を撥ね退けるのも忘れ、綾香は夢中でフェラチオに勤しむ。
（ンッ、そっちこそ、そんな焦らさないでッ……こっちはッ、んちゅッ、し、仕事なんだから……ぁ……ッ！）
路上セックスでの記念すべき一本目のペニスを逃すまいとするかのように、頬を思い切り凹ませ、ジュポッジュポッと水音を立てて吸い上げると、バキュームフェラの威力に男の肉棒は極限まで膨張し、頬裏でビクビクと痙攣する。
「うハァッ！　なんだよぉ、コレぇッ、本当に、全部吸われちまうッ！」
痴女捜査官の常軌を逸した熱心さに、男は悲鳴を上げた。
「おおッ、ダメだッ！　もう出そうだ……ッ……！」
「んぼぉッ！　ひょうらいッ、あやかの口マンコにぃ、ザーメンミルクひょうらいッ！」
ビクビクッ！　ビュクッッ!!
突然暴れるように大きく痙攣した肉棒から、熱い精液が勢いよく噴出する。
「ぉほっ、出る！　出るッ！　アハッ！　アハハハ！　お嬢ちゃんの咽喉マンコにくっさいチンポ汁ッ、ドクドクぶっかけてるぞぉッ!!」
高笑いをしながら、ホームレスは狂ったように前後に腰を振り、少女の口腔に精を放ち続けている。
「ンンーッ、んくッ、んくッ……ぅ……ッ……！」
白濁の水鉄砲は、ぴゅッぴゅッと咽喉を打ち、少女の爛（ただ）れた渇きを束の間癒した。

「……んくぅッ……んッ、んはぁ……ぁ……んちゅ……」
元のサイズに戻ったペニスを引き抜かれても、綾香はだらしなく半開きになった口から涎を垂らしたままだった。
「おぉ……オジサンの一番搾り、そんなに美味かったか？」
「ん……ッ、すごく、臭くて……美味しかったぁ……ッ、はひ……ぃ……ンッ!?」
尿道口から垂れ下った白濁も啜ろうと伸ばした舌を、躾を受ける犬のように下顎ごと指で摘まれ、力が入らないまま情けない声を出す。
「ひゃう……ひょれも、な……なめりゅ……」
「こんなにカワイイ顔してるのに、へへッ、お腹の中にはオジサンのチンポ汁が入っちゃったんだな……」
息を弾ませながらもニタニタと笑い、項垂(うなだ)れた肉ホースを握ると、少女の顔面目がけて扱き立てる。
「最後はそのお顔にニオイ付けしてやるよ、ホレッ……！」
ぷちゅッぷちゅ……ッ！
尿道から上気した頬や鼻筋に精液の雨垂れが飛び散り、唇も汚す。
「ひゃッ……オチンポじるッ……おいひいれす……」
息をするたびに自分が汚されていくという、確実な実感。だが、流れるのは涙ではなく、姫割れからとめどなく溢れる愛蜜だ。

（……美味しい……でも、オマンコに入れてもらわないと、あぁッ……やっぱり満足できない……）

解放された舌で肉棒を舐め廻しながらも、もう次の牡を求めて綾香は身体を火照らせる。

「……こんなに気持ちイイのは初めてだよ……お嬢ちゃん、最高だ。オジサン、もう一滴も出せないよ」

男はそんな事を言いながらもイチモツを仕舞い、ズボンのファスナーを上げる。

「……あぁ、ドスケベ痴女のお嬢ちゃんに、お代だよ……」

（ンッ、あぁ……私、捜査官なのに、こんな路上で……売春……しちゃった……）

手に押し込まれた生温かい十円玉を握りながら、女捜査官は自堕落な笑みを浮かべ、そのまま軽く失神したのだった。

ふと、立て看板の向こうに誰かの気配を感じて、綾香は目を開いた。

（……あ、まだ、顔に……精液、付いてる……）

いつの間にか脱いでいたブラウスを拾い、胸元に抱えるようにして、下着姿の女捜査官は暗がりに声をかける。

「……キミ達、ずっとそこにいたの？」

すぐ側の叢に、部活帰りらしいジャージ姿の少年が二人、恐る恐るといった態で立ち膝になっていた。一人は色白で、もう一人は茶髪だ。そのズボンの前は、どちらも盛り上が

っている。
「ハァ……ッ、こんな遅くに……どうしたのかな？」
少年達は上気した顔を見合わせた。
（この子達……私のこんな格好を見て、反応しちゃってるんだわ……）
「……お姉さんに、興味があるのね？」
未成年者を犯罪の道から遠ざけるのも、捜査官としての大事な使命の一つだ。
「だからって、こっそり覗いたらダメよ、見たいなら、ちゃんとお願いしないと……」
女捜査官は、少年達に教育的指導を行う事を決める。
（この子達が、欲望のままに女の子に手を出さないように……そう、私が……ちゃんと、教えてあげないと……）
「あっ、ボ、ボク……やっぱり、いい……です……」
色白の少年は身を引く素振りを見せるが、茶髪少年がその腕を掴む。
「ケイスケ、いいから、こんなチャンスもうないぞ」
漫画やＡＶの話ではない。学校帰りに痴女に出会う。確かにこんな機会はもう二度とないだろう。茶髪の少年の目は異様な興奮に獣のように光っている。そんな様子を見て、痴女は妖しく微笑み、股間をゆっくりと広げた。
「……ほら、見ていいのよ……」
肉花弁を指で開いて見せると、囚人達に中出しされたスペルマが、泡立ちながら膣口か

らドロリと零れ、向かいのビルのネオンに妖しく染まる。
「うぉ……スゲェ……」
「これがオマンコ……そして今出て来たのが、赤ちゃんの種、オチンポミルクよ……ふふッ、キミ達はもう学校で習ってるかな」
ぺろ……ッ、ちゅぱ……ッ……。
陰唇に溜まった白濁を人差し指で掬い、舐めて見せると、その淫猥極まる光景に少年達の鼻息がどんどん荒くなってくる。
「コレ、何だ？」
最初ににじり寄って来たのは茶髪の少年。敏感な肉芯をいきなり指先で突かれて、綾香は「ひゃうッ!?」と腰を躍らせてしまう。
「あんッ、そこはいきなり触っちゃ……ッ！」
だが、少年達にとって、初めての女体は驚きに満ちている。色白の少年もいつしか綾香の身体に手を伸ばし、硬く膨れたクリトリスを物珍しげに指で摘み、クリクリと捻り廻して笑い合っていた。
「あはは、コリコリしてるッ！　コントローラーみたいだ」
「ひぁッ！　そんな乱暴にしないでッ！」
敏感過ぎる女体を欲望と好奇心のままに弄られ、少女は抗議するものの、その声は鼻にかかった甘ったるいものだ。

「お姉さんのおっぱい、すんごい柔らけぇ……ッ、ふかふかする……」
ケイスケと呼ばれた色白の少年は、ブラから露わになった乳房を変形するほどに強く両手で掴み、その感触に上擦った声を漏らす。
「ああン、もっと優しくぅ⁉」
ぎこちない愛撫だが、それがかえって新鮮な快感になっていた。
（くぅッ、まだ全然加減が分からないのね……この子達、本当に初めてなんだわ……うふふッ、カワイイ……）
刈ったばかりの草のような青臭い体臭は、今まで抱かれて来た男達にはない初々しさだ。
少年達がその性の扉を今まさに押し開けているのだという背徳的な興奮が、女捜査官をさらに大胆な行為に進ませていく。
「ねぇ、お姉さんが……ハァッ、教えてあげるから……セックス、しよ……？」
（そうよ、こういう機会に、性的快感を正しく教えるのも……必要な事なのよ……）
まずは色白少年のズボンに手をかけ、ペニスを取り出してやる。
（……そういえば、あの写真も……私、こんな風に……誰かを指導していたのかも……）
送られてきた写真の中の自分と、今の自分が、不意に重なったような気がして、綾香は目を輝かせる。
「……あぁッ、お、お姉さん……ッ、ハァッ……ハァァ……ッ……」
恥ずかしげに喘ぐ色白少年の横に並んだ茶髪少年のペニスも取り出し、二本のペニスを

両手に握り、交互に頬張る。
「キミ達ッ、お姉さん、もう……ッ、我慢できないのぉ……ッ！」
ぢゅるぢゅるッ……ぢゅぷぷ……ッ！
「んぱぁッ、童貞クンのオチンチン、美味しい……！」
ぶじゅるッ！　じゅじゅじゅじゅ……。
（今までのオチンチンより細いけど、すっごく硬い……これで、ここ掻き回されたら……）
幼ペニスにまで劣情を抱いてしまう熱い身体を、牝豹のようにしなやかにくねらせ、乳房を弾ませて、牡の覚醒を呼び起こそうと、渾身の舌奉仕を開始する。
「ねぇ、気持ちイイ？　お姉さんの舌、感じる？」
「んあッ……わ、わかんないッ……けど熱くてッ、アァッ、破裂しちゃいそうだよ……！」
初めて知る口腔の熱い粘膜に少年の性感が膨らんでいくのが分かる。
「もっとキモチよくしてあげるからねッ……ぶじゅる！　ぶじゅるるッ……！」
一旦口の中からペニスを出すと、左手の親指と人差し指で輪を作って勃起の根元を締め付け、右掌で張り詰めた睾丸を包み込むように持ち上げ、やわやわと揉み、同時に唇で亀頭を挟んで吸った。
「あああッ！　キンタマ溶けるぅ⁉」
「お姉さんの顔、エロいよッ……見てるだけで出そう……！」

女捜査官の頬に髪に腰をぶつけるようにして、少年達がそれぞれ息を弾ませた。
「ンあぁ、オレもッ、あッ……もう我慢できないよッ！」
最大限に勃起したペニスの根元にぶら下がる睾丸が、ビクンビクンと苦しげに弾む。
「ねぇッ！　お願い……ッ！　もういいよね⁉　お姉さんのオマンコに入れてッ！」
少年達のはち切れんばかりの劣情に、感極まった声で女捜査官は叫んでいた。
「キミ達ッ、ハァッ、本当はッ、こんな、お姉さんみたいな痴女なんかじゃなくて、ハァッ、ちゃんと、女の子とッ、あぁ、童貞を捨てなきゃ、いけないのに……ッ‼」
そうは言いつつも、もう一本の肉棒はしっかりと掴んだまま、色白の少年を地面に押し倒して、屹立した肉棒目がけて膣口を落としていく。
ズブズブズブ……ゥ……！
精液ローションのぬめりが、少年の初めてをあっさりと呑み込んだ。まさにその姿は、少年の童貞を奪う痴女そのものだった。
「はぅンッ！　ほらッ、犯して……ッ、お姉さんのココ、痴女のオマンコなのッ！　だから、ンはぁッ、いっぱい犯していいのよ……！」
女性上位のスタイルで、綾香は腰を前後に動かし始める。こうすると子宮口に亀頭が当たり、なおかつ肥大したクリトリスも刺激されるという事を、身体はもう覚えているのだ。
（細いけど、すごく硬くて……ッ、はンッ！　いつもと違う所が刺激されてるッ！）
「んぁッ！　ケイスケ君ッ、キミのオチンポがッ、お姉さんの子宮の入口、グリグリして

るの、分かる……ッ!?」
「ンンッ、ハァ……ッ！　これがッ、あッ、オマンコの中……ッ!?」
身悶えしながらそれでも本能のなせる技か、少年は腰を突き上げ始める。
ズチュッ！　ヌチュッ！　ズチュッ！　ヌチュチュ……ッ！
「あはン！　イイのぉッ！　童貞オチンポでッ……あぁッ！　オマンコ犯されてるッ！」
痴女と少年は互いの性器をこれでもかと引き付け合って、律動を一つにする。
「お姉さんッ、オレのチンポも入れさせてくれよッ！」
手コキしかされてない茶髪の少年が、切羽詰まった声になる。
「オレもッ、オレもマンコの中で出したいッ！」
ガバッと覆い被さり、友人を押し退けるように勃起の先端を二人の結合部に突き当てる。
（え？　もう、オマンコには入ってるじゃないッ!?　いくら細いっていっても、そんな……ッ、二本をいっぺんにだなんて、嬉しいけど、ハァッ、む……無理よ……ッ！）
少女の煩悶を知ってか知らずか、遠慮などしない若牡の肉棒が欲望のままに膣口をこじ開け、先客棒と膣壁の間に押し入って来る。
ミチミチ……ミチミチミチ……ッ！
「あぁ！　オマンコの中ッ、広がるッ!?」
膣壁を挟んで内臓がごそりと動く感触に少女は目を見開く。単体では成人男性のそれよりも細いペニスだが、二本になれば今度は一本の巨根並みの容量で膣内を押し広げていた。

「あああッ！　嘘みたい！　オチンポッ、いっぺんに二本も、入っちゃってるッ……！」
初めて味わうヴァギナでのダブルファックに、牡の味を知り尽くしているはずの痴女肉壺も激しい興奮に打ち震える。
（ンはぁッ、こんなッ、さっきまで童貞だったコ達のオチンポが……あッ、オマンコにギュウギュウ詰まってッ！　中でゴリゴリ擦れ合って、暴れて……ああッ、スゴイ……!!）
二本の勃起で膣内を抉られて、その圧迫感と充実感に酔い痴れながら、綾香は汗だくの裸身をくねらせる。
「えへへッ、お姉さんのマンコッ、オナニーより全然イイよ！」
余裕が出て来たのだろう、少年達は息を合せるかのようにして汗まみれの乳房を握り、組み敷いた美牝を思う存分悶えさせる事に夢中になる。
（わ、私の痴女マンコ、このコ達の童貞……食べちゃってるッ！）
時に同時に、時に交互に、激しく突かれるたびに、女捜査官の理性は粉々に砕けていく。
「あッ、ひうッ！　ひぁぁッ……ああッ！」
二本の牡幹を貪欲に呑み込んだ牝穴は、奥と入口をキュッと締め、愛しい幼肉棒が抜けてしまわぬよう無数の襞で虜にする。
「ズコズコしてッ！　お姉さんのオマンコに、ハァァッ、好きなだけブチ込んでぇッ！」
美痴女の哀願に応えようとするかのように、少年達のピストンの激しさが増す。
「うぅッ、もうッ、ボク……ッ、で、出そうッ！」

イソギンチャクのようにウネウネと蠢いていた膣襞が、絶頂の予感と共に一斉に収縮し、放すまいと淫牝の本能を露わにして肉棒を吸う。吸い立てる。

「やっと言えたな！　そうだッ！　お前は痴女で、誰にでも股を開く肉便器なんだよ！」

自分も興奮が頂点に達したのか、城ヶ崎は射精しながらもなお激しくピストンする。

ビュクッ！　びゅるびゅるびゅるッ！

灼熱の迸りが子宮目がけて噴出する。子宮が歓喜に震え、待ち望んだ子種汁を飲み干そうと子宮口を深く開いた。

「ひぁぅッ⁉　もう、あたま、くるうッ！　おちんぽでくるっちゃうぅぅぅぅ‼」

頭と子宮が沸騰したまま、綾香はイきっぱなしの状態で容赦ない抽送にアクメ顔を晒す。

ぞりぞりぞりぞりィィッ‼

空っぽになった頭を、バイブの駆動音がいっぱいに埋める。

「あひィッ、またイくッ⁉　おひりも、まだッ、イく！　イくのとまらにゃいいッ⁉」

咽喉が裂けんばかりに絶叫しながら、今までに味わったどの絶頂よりも深く狂気じみたオーガズムに、少女の意識はついに途絶える。

（……あぁ……思い出した……肉便器になるのって……痴女としてご主人様に犯していただくのって……こんなに幸せ、だったんだ……）

乱れた髪を頬に張り付けたまま、うっすらと笑みすら浮かべて気絶している少女。

コポッ……。

肉棒が引き抜かれると、激しい陵辱に緩んだ姫割れから一筋の白濁が流れ、熱く蒸れた双臀を伝って椅子の上に小さな水溜まりを作った。

「……んぐ……ぅ……ンぼぉ……ッ……」

まるで憑かれたかのように首を前後に激しく振りながら、咽喉の奥へと激しく肉棒を出し入れしている美少女。顔は汗と唾液に塗れ、緩んだ笑みは彼女が既に身も心も生オナホへと堕ち切っている事を物語るのに十分な白痴的なものだ。

（ンンッ、咽喉でオチンポごしごしするの、クセになっちゃう……）

「隊長様は咽喉マンコ奉仕が病み付きになったのかな？」

「ンハァ……ご奉仕ッ、ご奉仕好きぃ……」

食道をカウパー腺液が流れ下っていく感触だけで膣肉が切なく収縮して、ここにも早く肉棒を挿れて欲しいとおねだりをしている。

（あぁ、オマンコにも、ケツマンコにも欲しいけど、でも……ッ、まだしばらく咽喉マンコでご奉仕、ハァン……していたいのぉ……）

一つの女体の中で、躾けられた幾つものザーメン壺が男根の感触を求め淫らにヒクつく。

「ンンッ、んちゅ……ッ……」

自らを肉奴隷と認めてしまった女捜査官は、逮捕するはずだった男の肉棒にむしゃぶりつき、腰をくねらせながら奉仕の快感に浸り切っている。

「お前は痴女で肉奴隷、この俺の所有物だ。俺のチンポに仕える事がお前の全て。お前がイっていいのは、俺が許可を出したその瞬間だけだ……分かったか？」
「はぶ、ぷちゅッ……あ、ありがとうございます、ご主人様ッ、嬉しいです……ッ！」
ドプッ、ドプドプッ……ドブブゥッッッ！
「むぶふむうッ!!　ンッ、んぶっ……んむおぷぅッ！」
感激の涙を流しながら綾香は口中で白濁を受け止めた。
（あぁッ、嬉しいッ！　ご主人様に、こんなに出していただいてる……！）
心の底から感謝を感じて額ずく少女の頭を、詩織が優しく撫でる。
「本当に可愛い子ね、綾ちゃんは……それじゃ次は私とシましょうね」
綾香はぽってりと膨らんだ唇を開き、紅い舌を突き出し外気に晒す。まるで従順な家畜が餌をねだるかのように。
「あぁ、詩織さぁ……ん……どうぞ、綾香の淫らな口マンコを躾けて下さいませ」
ベチョッ……ネチョォッ！
「はひいぃンッ!?」
舌を横からネットリと舐り上げられて、少女はそれだけでビクビクと身体を震わせる。
「ンぷうぅッ！　んぷ、んひゅ、はぷッ……ブチュブチュブチュゥゥ!!」
思い切り吸い上げられ、かと思えばまるで愛液のようにとろみの付いた唾液を流し込まれ、綾香の口元は、いとも簡単に決壊してしまった。

「ひゃふっ、ンぷあぁ、イくッ、イくぅぅッ、ダメぇぇッ!!」
悶え啼きながらも健気にアクメを堪える様が愛らしい。
「……ハァン、綾香ちゃん……私ッ、本当に貴女の事、あぁ、愛してる……」
爆発寸前の快感の中で、甘美な言葉に綾香の胸が震えた。
(詩織さん……私の……たった一人の家族だった人……)
ずっと憧れ、目標としてきたその義姉も、今は肉奴隷として目の前の男に仕えている。
(こうしてご主人様の肉便器になれても、私の事、こんなに愛してくれている……)
義姉の愛に応えたい、という思いが、甘い吐息となり、睦言を紡がせる。
「あ、あぁ……ン、私もぉ……ハァッ、愛してます……ぅ……」
初めて会った時に覚えた憧憬は、義姉への恋慕と欲情とに形を変えて、堕ちた今でも少女の中にある。
「フフッ……お前達二人とも姿を消して、首都警は大騒ぎしているぞ。いっその事、その格好のまま自由の身にしてやっても面白いかもな」
胸元まで互いの涎で汚しながら舌を吸い合う義姉妹を、城ヶ崎がけしかけるが、その言葉を、綾香はどこか遠くに感じていた。
(自由って……それは今より、幸せな事……?)
少女にとって、もはや自由や正義という言葉よりも、義姉と共に痴女肉奴隷として男に奉仕する未来の方が数万倍も魅惑的だった。

（そう、これからの私は、痴女らしい未来を、生きていけばいい……悩む事も、苦しむ事もない、ただこうして、ご主人様にお仕えする毎日を、私は……）

「……ンぶちゅッ、いえ、ご主人ッ……あ、綾香は……詩織お義姉様と、これからもここで……ッ、あふッ、痴女として……一生、ご主人様の肉便器としてお仕えいたしたいと思います……ッ！」

綾香の言葉に、男はニヤリと笑う。

「可愛い奴隷達だ。自分が知った女の幸せを互いに分かち合いたい、という事だな」

「はひッ、そうですぅッ」「あぁ……その通りですわ」

義姉と一緒にザーメン塗れのキスを交わし、肉棒にむしゃぶりついたまま同時アクメする。そんな淫らな想像に、綾香の胸も子宮もキュンキュンと疼いた。

「それではさっそく美しき肉奴隷姉妹の、初めてのダブルフェラを見せてもらおうか。もちろん最後はたっぷりのザーメンをトッピングして同時にイくんだ」

詩織の深い谷間に垂れた精液も大切そうに舐め取りながら、綾香は歓喜の表情で答える。

「ありがとうございますッ、ご主人様……ッ」

かつては法の執行官であった者達の噎せ返るような性臭が地下室を満たす中で、堕淫劇の最終幕が上がろうとしていた――。

「ンぶちゅッ、ぷハァッ……綾香ちゃんの口マンコぉ、最高よぉ……!!」

「はぁン、詩織さんもぉッ、ベロチンポすごすぎぃぃ」
深々と腰掛けた城ヶ崎の足元で、綾香と詩織は再びブチュブチュと舌を絡ませていた。
「嬉しいぃ、私ッ、こうして二人でご奉仕できる日を、待ってたのよぉ」
彼女達の間には、隆々とした肉棒がそそり勃っている。それを交代で咥えては、開いた唇同士を擦り合わせる。
「あぁッ、私ぃ！　ご主人様の痴女肉奴隷になれてとっても幸せ。綾ちゃんもッ、ンくはぁッ、幸せになってぇ！　ご主人様のザーメンシャワーをたっぷり浴びて……ん、んく……ハァァンッ、一緒にイきましょうね……ぇッ!!」
床に膝を突き、抱き合って、二人のマゾ捜査官達は官能の高みに登りつめていく。
ぬちゅッ、ぷちゅッ、ぬちゅちゅッ！　ぬちゅぷちゅぅぅぅッ！
「ご主人様のザーメンッ、ハァッ、欲しいですぅ」
愛液の匂いの染み付いた肉塊を挟むようにして、二枚の牝舌が妖しく蠢く。
（ンあぁ、ご主人様の裏筋ぃ……ビクビクッて、苦しそう……）
怒張の筋にもカリの根元にも、幾重にも唾液を重ねて舌でなぞり、唇で優しく啄ばみながら、奴隷姉妹はすらりとした下腹部をめいっぱい突き出して宙に円を描く。
（苦しッ……私も、キモチよすぎてッ、もう……我慢できない……ッ！）
「……あ、ハァ……ごひゅひんさまぁ……も、もうッ、イかせてくらひゃい！」
「ぶちゅ！　ンハァッ！　ひおりもぉ！　オマンコのッ、おゆるひをぉ……ッ！」

空腰でアクメの階段を上りながら啼き交わす美牝達の願いは、ついに通じて、
「よしッ、二匹とも上を向けッ！　ザーメンミルクをくれてやる！」
ドプッ、ドプププッ‼
粘りの強い子種汁が鈴口を押し開けて、中に白い軌跡が伸びた。
パチャパチャッ！　ピチャ……ッ！
「ひおりはぁン！　じゅぷぅッ、あやかイくぅ！　ごひゅひんひゃまのオチンポナメナメしながらッ、ひァッ、ひおりひゃんのベロチンポでイっひゃう！　イっひゃうのぉ‼」
温かくて生臭い飛沫が、鼻に、額に、唇に、雨のように降り注ぐのが心地よくて、綾香はイきながらも無邪気な笑みを浮かべる。
「ほらッ、まだ出てるぞ！　しっかり飲み干せ、肉便器ッ……！」
栗の花の匂いの中、惚けた口元にまだ脈動しているペニスを深々と挿入され、精液を吸い上げた。
「ンくッ……！　ンく、んはぁッ……ぶちゅぅ……ッ……！」
（好き好きぃッ！　ご主人様も、詩織お義姉様もッ、大好きぃ……‼）
「詩織、お前も飲むんだッ！」
「……はいぃ……ンンッ、ンぷぅッ！」
愛する義姉と交代で口中へ精液を注がれながら、綾香はついに、秘裂に一度も触れられる事なく深い絶頂を迎えたのだった。

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!